

## 附属校・公立学校との共同研究事業活動概要報告書

## 3つの「学びをつなぐ」授業づくり～主体的・対話的で深い学びに向かうために～

【研究代表者】	谷尻 治	(和歌山大学教職大学院)
【共同研究者】	貴志年秀	(和歌山大学教職大学院)
	林 真希	(和歌山大学教育学部附属小学校)
	中山和幸	(和歌山大学教育学部附属小学校)
	早崎大輔	(和歌山市立有功東小学校)
	前田 峻	(和歌山市立有功東小学校)
	中山雄一朗	(和歌山市立有功東小学校)
	中山義之	(和歌山市立加太小学校)
	藪 隆政	(和歌山市立雑賀小学校)
	赤松広志	(和歌山市立雑賀小学校)
	細田和希	(和歌山市立雑賀小学校)

## 1. 今年度の共同研究について

『3つの「学びをつなぐ」授業づくり～主体的・対話的で深い学びに向かうために～』

「総合的な学習の時間」の共同研究3年目にあたる今年度は、上記のテーマでこれまでの研究を一層発展させるべくスタートした。ここでいう、3つの「学びをつなぐ」とは、「実社会や実生活とつなぐ」「一人ひとりの学びをつなぐ」「授業と授業、単元と単元をつなぐ」の3つである。総合的な学習の時間の醍醐味は、体験を重ねた探究的な学びを通して、子どもたちが新たなものの見方や考え方・生き方を獲得していくところにある。このような学びを目指し、メンバーも拡大して共同研究を始めようとした矢先にコロナ感染拡大により、教育活動に様々な規制がかかった。何より、公開授業の開催が困難となり、必然的に授業をめぐる協議も重ねることが難しい状況となった。

しかし、特筆すべきは、この共同研究に関わっている各教員が、コロナ禍においても、従来と変わらないほど濃密な教育実践を進めていたことである。附属小学校はオンラインの活用で新たな公開研究のあり方を全国に先駆けて示された。また、生活科・総合的な学習の時間を学校あげて研究されている和歌山市立有功東小学校が現職教育(校内研修)で、大学教員を助言者として度々招くなどして果敢に研究活動を維持された。これらに象徴されるように、学校あげて、学びを切らさない努力をされ続けたことに敬意を表したい。今年度は誌面の関係ですべての実践を取り上げることが出来ないが、各校・各教員が感染対策を取りつつ、斬新な実践を展開されていたことは記しておきたい。

## 2. 今年度の主な活動

共同研究メンバーの「総合的な学習の時間」に関連する主な活動は次の通りである。

## (1) 共同研究協議会

SNSを活用して、随時、共同研究メンバーが進めている「総合的な学習の時間」の状況を交流、また、講演会の企画などをおこなった。

## (2) 公開授業研究会開催時の相互参観・協議会参加等

\* 下線は授業者、下線なしは発表者または助言者。参加者は省略

- 9月 9日 和歌山市立有功東小学校にて開催の現職教育高学年部会 (中山雄・貴志・谷尻)
- 10月 14日 和歌山市立有功東小学校にて開催の現職教育 (前田・貴志・谷尻)
- 10月 21日 和歌山市立有功東小学校にて開催の現職教育 (中山雄・谷尻)
- 11月 17日 和歌山市立有功東小学校にて開催の現職教育 (早崎・貴志・谷尻)

2月13日 和歌山市立加太小学校にて開催の自主研究実践発表会（中山義）

(3) 講演会

2月20日 石堂裕氏講演会&実践発表会を、生活科共同研究グループと共催でオンラインにて開催した。今年度の実践を3名が発表（田中・前田・細田）。オンライン参加者総数は〇〇名であった。

(4) その他

10月15日 「リビング和歌山」で、雑賀小4年の水の繋がりの学習が紹介された（赤松）

12月6日 おもしろ環境まつりのパネルディスカッションに登壇した（赤松、中山雄）  
おもしろ環境まつりの環境学習発表で担任学級が発表した（藪、赤松、中山雄）

12月12日 「ニュース和歌山」で、加太小6年の映画制作の学習が紹介された（中山義）

2月9日 「テレビ和歌山」で、雑賀小5年の里山づくりの学習が紹介された（細田）

### 3. 共同研究者実践概要

#### 単元名『写真を使ってPR ～我が町六十谷のすてきな人・場所～』

実践者：前田 峻（和歌山市立有功東小学校6年風組）

6年生の総合的な学習の中で、写真を使って地域をPRする活動を行った。この学習のねらいは、①子供たちが積極的に表現することができるようになること②友達の写真を見たり、地域に写真を撮りに行ったりすることを通して友達や地域の良さを再度知ることであった。

最初は「写真を使って総合をしようよ」と教師から投げかけをした。そこから何をするのか疑問に思っていた子もいたが、多くの子供はデジタルカメラ（グループに1台）で撮影できることに興味を持ち、まずは校内で写真を撮って紹介する活動を行った。写真を見て、笑いあったり、「おー」と歓声をあげたりと、撮った写真を見る活動を振り返った時には、「みんなで撮った写真でコンクールをしたい」「学校の中以外にも撮ってみたい写真がある」という意見が出てきた。そこで、クラス内でコンクールを開き、地域の写真館方に写真の好評をしてもらおうなど、写真を撮る技術や意欲を高めることができた。

その後は自分たちが撮った写真を地域の人にも見てもらいたいと、地域のお祭りである「いさおふれあい祭り」に写真を出展し、様々な人に撮った写真を見てもらうことができた。写真展には実際に子供たちが参加することはかなわなかったものの、写真展を見た人のアンケート結果が良好だったことから、「たくさんの人に写真を見てもらえてよかった。」「地域の良さを再発見してもらえたのはうれしかった。」と子供たちが発言していた。写真展を通して、子供たち自身も地域の良さに気づき、表現することにも自信を持つことができた。3学期は、アンケートの中に「もっと人の写真があってもよい。」とあったことをふまえて、撮影した写真をもう一度地域で見てもらえるように展示をする予定である。



#### 単元名「まだまだ課題は山積み食品ロスを減らそう

##### ～地域に根差そう5光のMOTTAINAI運動 in 六十谷～

実践者：中山雄一郎（和歌山市立有功東小学校）

昨今、大々的に全世界で問題視されている食品ロス問題について学習している。昨年4年生の時に1クラスが福祉観点で食品ロス問題について総合的な学習の時間で学んでいたが、今年度は環境問題に着目して食品ロス問題を取り扱った。

9月上旬、自分たちの身の回りには食品ロスがどれだけ存在するのかを確認するため、各家庭や学校

給食での食品ロス調査を行った。食品ロスを出さないように心掛けていたつもりだったが、意外と自分たちの家でも食品ロスとなるものがたくさん存在していたり、給食では簡単に食べ物が残されていたりする状況を目の当たりにした。特に学校給食の食品ロスはとても多かったため、全クラスに食品ロスを減らすように毎日の残食チェックやポスターでの呼びかけを行った。最初は効果があまり見られず、活動に意味があるのかと疑問に感じていたが、毎日の調査で少しずつ結果が現れたため意欲的に活動に専念できるようになった。

また、このような活動と同時に、企業や生産者などの食品ロス問題についてどのように対応しているのかを学習した。まず初めに、わかやま環境ネットワークの臼井さんと関わり、食品ロスと環境面のつながりをSDGsの視点から学ぶことができた。持続可能な社会を目指すために、食品ロスを少しでも減らすことがとても大事なことだと改めて感じる事ができた。

その臼井さんの紹介から、紀ノ川ファーマーズマーケットふうの丘の宇田さんや石窯ポポロの吉川さんと出会った。宇田さんからは食品ロスをできるだけ減らすために商品を加工したり売値を安くしたりする取り組みを聞き、吉川さんからは無駄なく食べ残されたものを肥料にしたり動物のエサにしたりする循環の取り組みについて教えていただいた。

食品ロス対策をしている人たちや5光の取り組みをまとめ、それを表現するために臼井さんと協力してオンライン開催でおもしろ環境まつりに出演し、動画で呼びかけることができた。



### 単元名「発見！千手川の魅力を探る」

実践者：早崎 大輔（和歌山市立有功東小学校5年風組）

5年生「総合的な学習の時間」で、校区を流れる川を教材に学習を行った。学習の主なねらいは、①千手川での自然体験活動や川を訪れる地域の人々との交流を通して、川の様々な魅力に気付くこと②地域の人々との活動を通して自らの思いや願いを実現し、地域の川への愛着を深めることとした。

単元では、まず子ども達が川へ出かけ、自然に親しみながら川を好きになる活動を意識した。生き物探しや魚釣り、川で水遊びをするなど、子ども達は全身で自然の魅力を味わった。次第に、水質や川のゴミに意識が向き、「水のきれいさを調べる」「落ちているゴミを拾う」などの学習へ進んだ。

また、川を訪れる地域の人々にも着目した。地域の人々の中には、小さい頃から川との思い出を持つ人や、毎日散歩で川へ来ることが生活の一部になっている人、ボランティアで川の堤防を手入れしている人など、川を大事に想う人々が存在する。この方々の声を聞くことは、地域に住む子ども達にとって大きな学びになり、その方々の想いもまた川の魅力になると考えたからである。子ども達は、川の自然を愛する人から、昔より環境が変化し生き物の数が減ったことを憂う気持ちや、川に棲むカワニナ（ホタルの幼虫のえさになる）を守りたいと思う気持ちをインタビューで聞き取った。子ども達は、このような思いに共感し「自分達にも何かできないかな」という思いを持ち始めた。時に川では洪水防止のため土砂を撤去する工事が始まり、川底がショベルカーで掘り起こされたり、川周辺に生息する植物が刈り取られたりと、川の自然環境がここでもまた大きく変化して



しまうこととなった。

子ども達は、人間の生活のためには仕方がないという思いと、自分達の好きな自然の川を残したいという思いの葛藤の中、「何ができるか」という思いを強くした。そして、ホテルの飛ぶ川を守るため、カワニナを少しでも増やせるよう学校で育て、放流するという活動を計画した。今後は、その計画を実行し、きれいな川を守るためのPR活動を考えていきたい。

## 単元名『自分たちの学校に生き物が集まる“里山”をつくろう！』

### ～32人のプロフェッショナルたちの軌跡～』

実践者：細田和希（和歌山市立雑賀小学校5年1組）

総合学習はやはり「総合を通してどんなことがしたい？」と尋ねるところから始めた。すると、今年度はコロナで2月から年度をまたいで3ヶ月間の臨時休校期間があったためか、「周りの人を笑顔にしたい」や、「みんなで協力して一つのものをつくりあげたい」という意見が多く出た。そういった願いを叶えるために何ができるかを考えて始まった「里山づくり」であるが、ある児童の呼びかけで始まった里山づくりなので、「なにか自然環境を学校の中につくるんだな」というぐらいのイメージしかない子どもたちが多く、学習はまず里山とは何か、何が必要なのか調べるところから始まった。そこで里山は人間が作りだした環境で、人が生活するための環境が、多様な生き物にとっても過ごしやすい環境であったが、そういった環境が近年失われつつあり注目されているということを知った。

また、実際に里山ビオトープ孟子を訪れ、里山を構成するものやそこに見られる生き物、それを守る大切さを学んだ。子どもたちは多様な生き物の住処であり、我々人間にとっても過ごしやすい環境を“里山”にとらえ、それを学校の中につくろうと畑や田を開墾し、田に引く水を貯めるため池を作り、花壇を作って花を植え、家畜としてポニーを飼い、そのふんを使って腐葉土を作った。また、無農薬・有機農法で野菜を作っている方にも話を聞かせてもらったり、実際に畑を見学したりなどして、自分たちの畑で無農薬野菜づくりに取り組んだ。



機農法で野菜を作っている方にも話を聞かせてもらったり、実際に畑を見学したりなどして、自分たちの畑で無農薬野菜づくりに取り組んだ。

こういった学習のなかで自然と生き物、人間のつながりや、無駄なものを出さず、自然の循環のなかで生きる良さについて体験的に学習してきた。今後は、今年度を“里山元年”とし、来年度以降どのようにしてこの環境を残していくかについて考え、里山が学校全体、そして地域からも注目されるものになっていくようにしていきたい。

## 4. 講演会&実践発表会

2月20日（土）、講演会&実践発表会を開催した。今年度はコロナ禍ということもあり、初めてオンラインでの開催となった。従来は和歌山大学にて開催していたこともあり、和歌山市の教員を対象として参加していただいていたが、オンラインということで他地域からの参加も容易となり、米国ニュージャージー州日本人学校からも複数の参加があるなど、参加者は広範囲にまたがった。合計50名近い参加者があった。

第1部では、生活科並びに総合的な学習の時間の今年度の実践を発表していただいた。3名の発表者はそれぞれパワーポイントを使って具体的に紹介された。発表者とテーマは以下の通りである。

①「写真を使ってPR ～我が町六十谷のすてきな人・場所」

（和歌山市立有功東小学校6年 前田峻教諭）

②「土を使って作ろう ～かまどづくり～」

（和歌山大学教育学部附属小学校1年 田中伸一教諭）

③「子どもが主体となって活動する街中の里山づくり」

(和歌山市立雑賀小学校5年 細田和希教諭)

本報告書にそれぞれの実践概要を掲載している。休業明けからの学習ということで例年よりスタートは遅かったものの、学びに飢えていた児童らが自分たちの探究心を存分に発揮し、スパイラル的に学習過程が発展していったこと、また、それぞれ「写真」「かまど」「里山」といったこれまであまり取り上げられていなかった学習材に着目して学習が展開されたところが、大変斬新であった。

第2部は、石堂裕先生（兵庫県たつの市立新宮小学校主幹教諭）による講演であった。過去二年続けて、石堂先生にご講演いただいております、今年度は、「With コロナでおこなう授業づくり ～『「令和の日本型学校教育」の構築を目指して』（中教審答申）を受けて～」と題するご講演をいただきました。講演日の約1ヶ月前に発表された中央教育審議会答申を受け、ご自身の今年度の実践と絡めながら、具体的に、これからの教員に求められる資質・能力や指導のあり方をわかりやすくお話くださった。特に、職場の全ての教員の指導力向上を目指して行われている研修のあり方などは、大変参考になるものであった。

参加者からは「自己評価の方法がとても参考になりました。コラボノートも使ってみてみたいと思いました。子どもの発達段階や子どもの思いや願いを大切にされた御三方の実践大変刺激を受けました。」  
「子ども達が、主体的に学習ができるように教材を選択され、ゲストティーチャーとの出会いが子ども達の次の課題につながるタイミングであることが共通していることであり、大切なことであると改めて感じました。またカリキュラムマネジメントを通して学習内容がつながり子供たちの学ぶ意欲を高めていると思いました。GIGA スクール構想による一人一台端末の活用についてヒントとなることを知れたので、勤務校だけでなく所属地域でも広げていければと思います。」などの感想が寄せられた。

## 5. 成果

今年度は様々な規制の中での教育活動を余儀なくされ、教員にとっては先が見通し辛い一年であった。これまで、この共同研究では教員の指導力の向上を目指し、学校の枠を超えて相互参観・協議・助言を重ねて、地域に根付いた学びのあり方を追究してきた。この流れが足踏み状態となるのではないかという心配が杞憂に終わった。ひとえにメンバーの主体的・意欲的な姿勢の故である。

コロナ禍で学校現場が多忙になっているとの懸念から、メンバーが一堂に会して実践を交流したり、協議したりするという場はあえて設定しなかった。しかし、今となっては、これは言い訳に過ぎないと感じる。それは、「オンライン会議」という新たなツールがメンバーの学びにいかせることが明白となったからである。オンラインでの会議の開催と共同研究遂行は十分に可能であったと反省している。

一方、この共同研究メンバーは、発足当初からSNSで繋がっていることもあり、研究代表者が中心となり、折に触れてそれぞれの実践状況を交流してきた。その発信に刺激を受けて、各教員が指導に前のめりになって学習活動に火がついたこともあるだろうと推測できる。また、児童自身も一斉指導中心の授業と規制の多い学校生活では満足できない状況となり、協働や体験活動への意欲が内側から湧き起こって、学習意欲が高まったとも考えられる。その結果、制約と規制がずいぶん多かった今年度においても、上記のような優れた学習活動が展開されたのではないだろうか。

今後も、「授業を広く公開し、批判的に学び合うこと」「全国の優れた実践にふれること」「和歌山市・和歌山県全域へ、学び実践したことを発信する」を念頭に置き、各自の意識を更に一段高め、この共同研究が和歌山の総合的な学習の時間の実践を全国に発信していく拠点になればと考えている。

## 参考文献

・中央教育審議会（2021）、『「令和の日本型学校教育」の構築を目指して ～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、共同的な学びの実現（答申）』

[https://www.mext.go.jp/content/20210126-mxt\\_syoto02-000012321\\_2-1.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20210126-mxt_syoto02-000012321_2-1.pdf)